

# 2023年度 ChanKan プロジェクト実施状況に関する調査報告

作成: ChanKan プロジェクトワーキングチーム

## I. 調査の背景と目的

居住支援は現行さまざまな形で提供されているが、ChanKan プロジェクト(以下、プロジェクト)では、外国人や若年層に対する社会資源が不十分な状況で相談者が生活再建のための各種支援制度につながるまでの切れ目のない生活支援の提供を目指し、「緊急に支援を必要とする住まいを失った、あるいは、失うおそれがある若年層(10代~30代)と外国人を対象とした宿泊施設等の一時的な確保とその間の食料支援ならびに必要な応じた社会資源の情報提供・同行支援等」を具体的内容としている。今後の相談支援に活かす目的で、全国での実施状況を調査する「ChanKan プロジェクト実施状況に関する調査」を企画した。

## II. 調査の方法

本調査では、支援の質を評価する試みとして支援者が実施した行為に着目し、プロジェクトの利用の効果を測定する目的でケーススタディ調査の手法を採用した。すなわち、支援者が対応に要した時間を指標とし、評価項目として初回相談時の支援のプロセスを①インテーク、②アセスメント、③関係機関との調整、④宿泊先の確保に分けるとともに、⑤次の支援フェーズに移行するまでに要した時間のそれぞれについて実際にかかった時間、ならびに、初回相談時に関係機関と電話等で対応した回数をたずねた。そして、評価項目のそれぞれについてプロジェクトを利用していなかった場合に同じ相談者(クライアント)にかかったと推測される時間や対応回数を尋ねた。評価項目ごとに二つの時間を統計学的に比較し実際にかかった時間の方が短かった場合、または、回数が少なかった場合にプロジェクトの利用の効果があつたと判定することとした。

調査期間は2024年2月1日から2024年3月12日とした。調査では相談者の基本属性および支援者の専門職としての経験等をたずねたが、個人を特定し得る情報を取得することはしていない。

回答者はプロジェクトを利用した支援者及び支援機関・団体を代表する相談員を調査対象とし、例示した下記のA~Cのカテゴリーに沿って支援実績のある相談者(クライアント)のそれぞれ代表する1例を想起してもらい、書面もしくはGoogleフォームで回答してもらう形式とした。

### A: 今日住む場所がない、家庭内暴力などの生命の危険がある

例) ネットカフェ等も含むホームレス状態にある方や家庭内暴力・性暴力の被害がある方など

### B: 生活困窮に陥っていて、住まいを失う恐れがある(経済的に困窮状態である)

例) 住まいや会社の寮から退居しなければならず、次の住まいが見つからない方など

### C: 生活には困っていないが中長期にわたる支援が必要(社会関係や家族関係のリスクがある)

例) 生活はできているが、家庭内不和や体調不安のため自立困難になっている方など

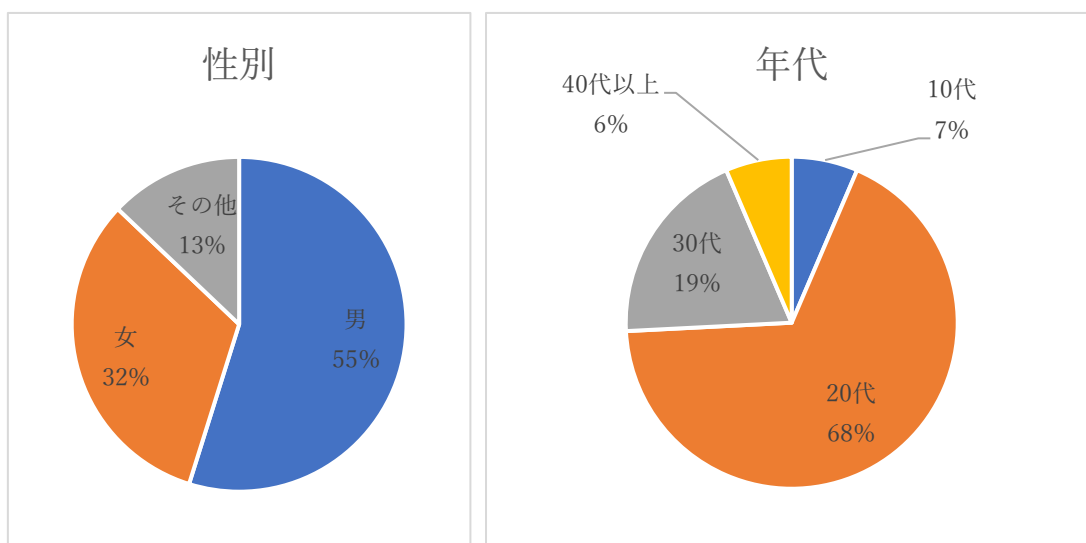
アンケート調査書類は、別添の「資料③ChanKan プロジェクト実施状況に関する調査」、「資料④2023年度 ChanKan プロジェクトアンケート調査の倫理書」を参照。

### Ⅲ. 結果

24か所の支援機関・団体から回答があり、A～Cの合計回答数は31件であった。A群は19件、B群は11件、C群1件であったため、本調査報告では主にA群とB群を精査の対象とした。

#### 相談者(クライアント)属性について

性別は、男性が17人、女性が10人、その他が4人であった。うち年代は10代が2人、20代が21人、30代が6人、40代以上が2人で、単身世帯が26件、複数世帯が5件であった。

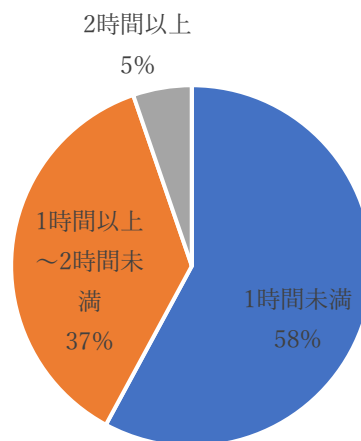


I. 今日住む場所がない、家庭内暴力などの生命の危険がある方に対し、ChanKan プロジェクトを利用したことによる相談支援の変化について

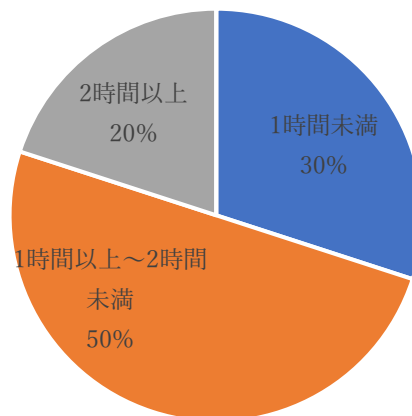
質問①—1. 初回相談時のインテークの時間(分)

中央値(最小値-最大値)は、A 群が 40(30-120)分、B 群が 60(15-120)分であった。

初回相談時のインテークの時間内訳 (A群)



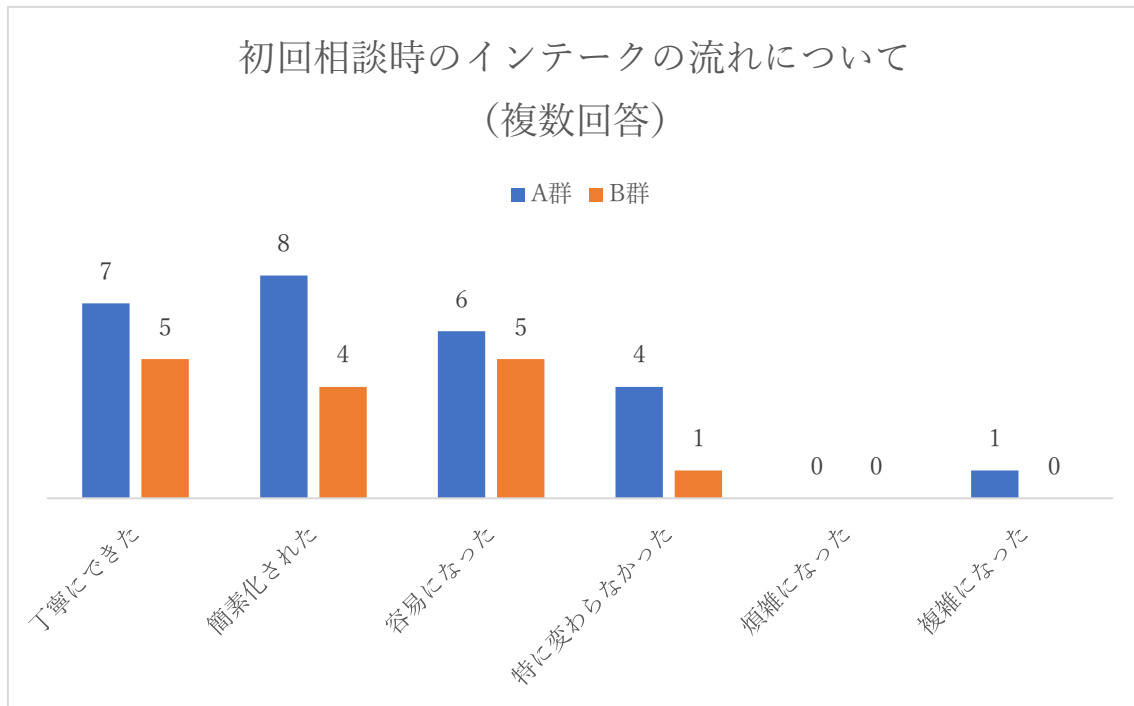
初回相談時のインテークの時間内訳 (B群)



初回相談時のインテーク時間に関しては、半数以上が 1 時間未満となっており、80%以上が 2 時間未満で実施できていた。緊急性の高い A 群ではインテークの所要時間が短いケースが多かった。

質問①—2. 初回相談時のインテークについて(複数回答)

A 群では、「丁寧にできた」7 件、「簡素化された」8 件、「容易になった」6 件、「特に変わらなかった」4 件、「煩雑になった」0 件、「複雑になった」1 件であった。B 群では、「丁寧にできた」5 件、「簡素化された」4 件、「容易になった」5 件、「特に変わらなかった」1 件、「煩雑になった」0 件、「複雑になった」0 件であった。



「丁寧にできた」、「簡素化された」、「容易になった」との回答が多かった。「煩雑になった」という回答に関しては、プロジェクトの利用に伴い、他機関との連携や宿泊支援実施に際して追加の聞き取りが必要であったことに起因していた。

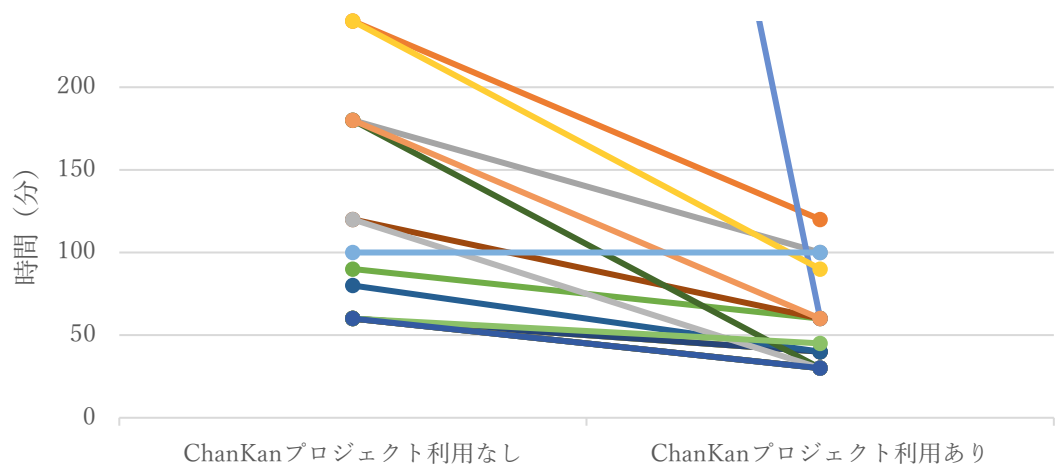
早急に宿泊施設を確保できることで、突然相談窓口に来所した相談者への対応もスムーズにできたとの回答があった。相談した当日に住まいが決まらない場合や生活困窮者自立支援制度の一時生活支援事業が利用できない場合の選択肢としても活用されていた。

①—3. もし ChanKan プロジェクトを利用していなかったらどれくらいかかっていたと思いますか？  
(分)

時間の中央値は、A 群が 90(60-1,440)分、B 群が 120(15-1,440)分であった。質問①—1 でたずねた、実際にかかった時間との差の中央値は、それぞれ、A 群が 50(30-1,320)分、B 群が 60(15-1,320)分であった。

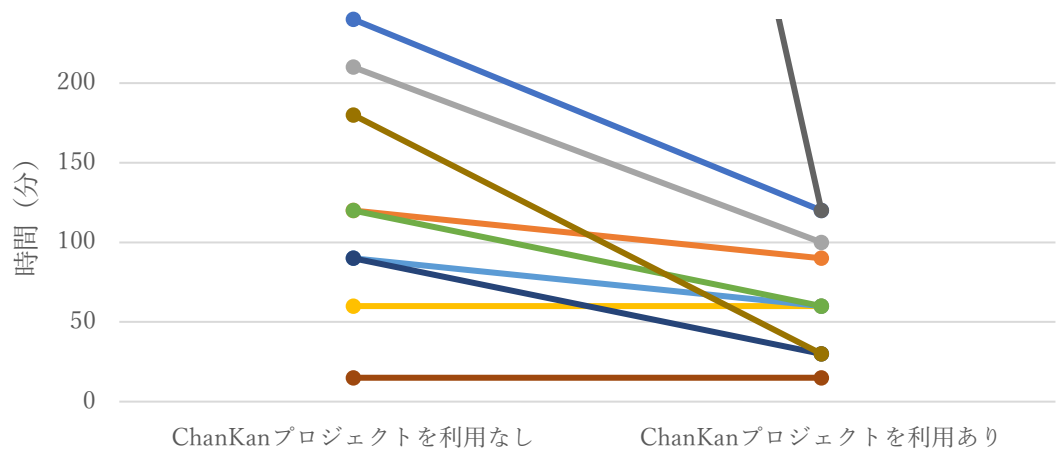
利用による変化として質問①-1 で得た値と質問①-3 で得た値を比較したところ、A 群で利用した場合の方が時間が有意に短かった(Wilcoxon's  $Z=-3.74$ ,  $p=0.0002$ )。

ChanKanプロジェクトを利用したことによる  
初回相談時のインテーク時間の変化（A群）



※全てのデータを表示できていない

ChanKanプロジェクトを利用したことによる  
初回相談時のインテーク時間の変化（B群）



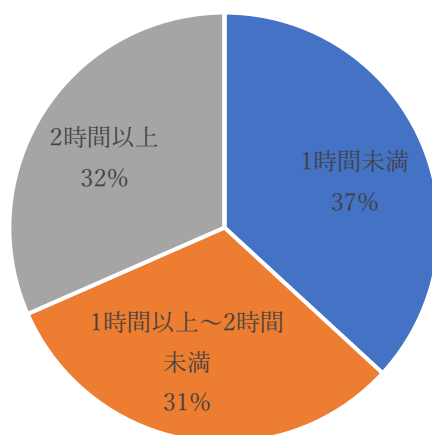
※全てのデータを表記できていない

プロジェクトを利用することで、初回相談時のインテーク時間が 30 分以上減少していることがわかり、地域の支援機関・団体の業務効率化が見られた。

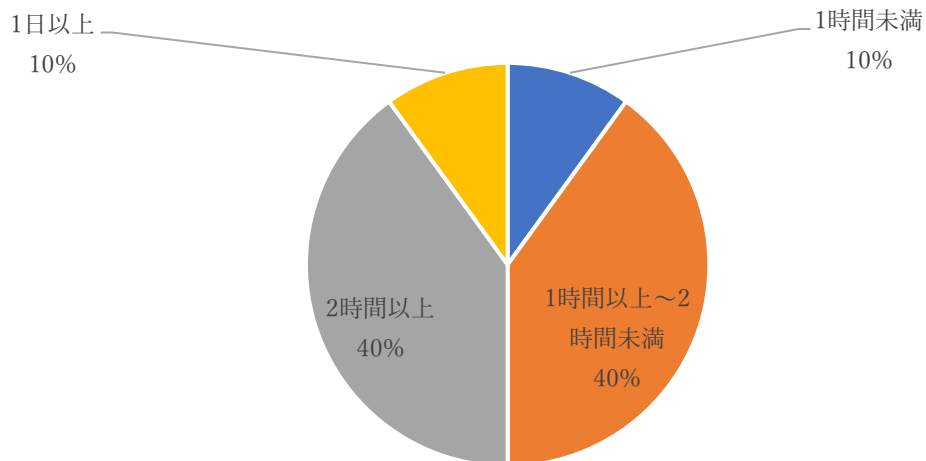
②—1. 利用中のアセスメント時間(分)

中央値は、それぞれ、A 群が 60(20-210)分、B 群が 60(0-210)分であった。

初回相談時のアセスメントの時間内訳 (A群)



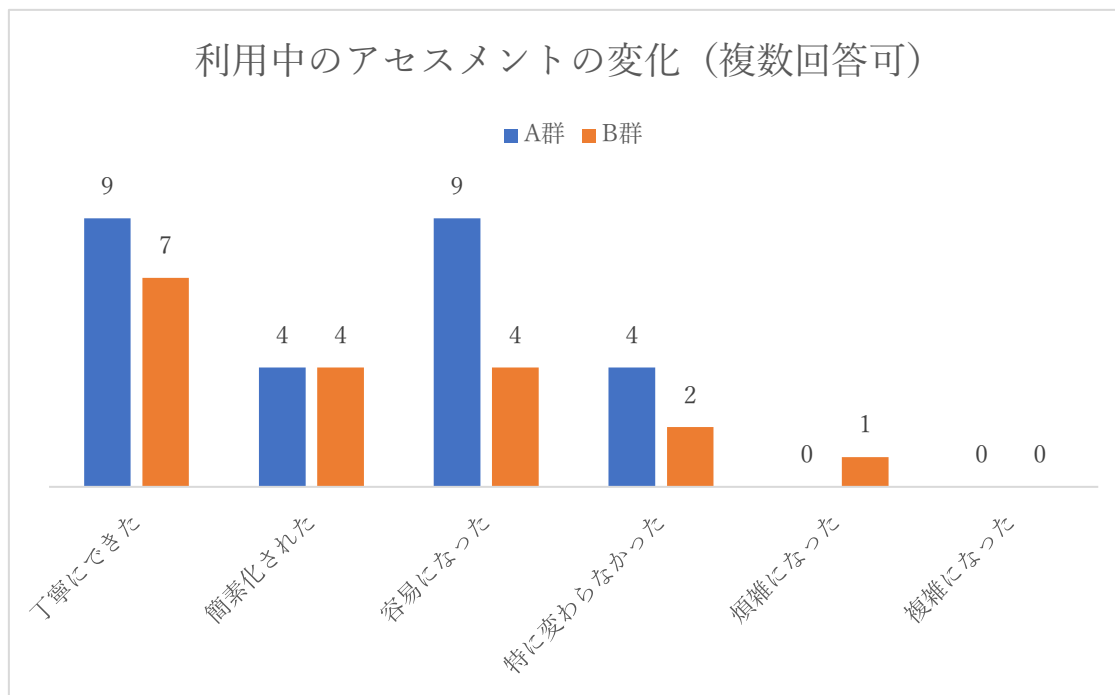
初回相談時のアセスメントの時間内訳 (B群)



アセスメントにかけた時間は、多くは 1 時間以上であった。

## ②—2. 利用中のアセスメントについて(複数回答)

A 群では、「丁寧にできた」9 件、「簡素化された」4 件、「容易になった」9 件、「特に変わらなかった」4 件、「煩雑になった」0 件、「複雑になった」0 件であった。B 群では、「丁寧にできた」7 件、「簡素化された」4 件、「容易になった」4 件、「特に変わらなかった」2 件、「煩雑になった」1 件、「複雑になった」0 件であった。

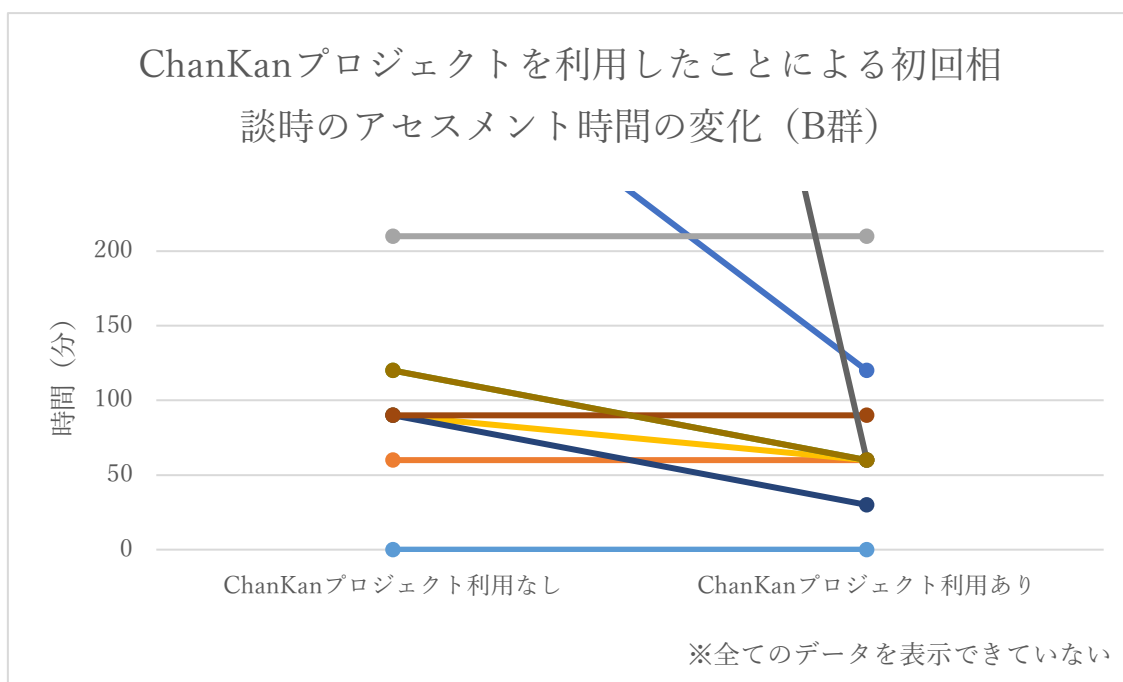
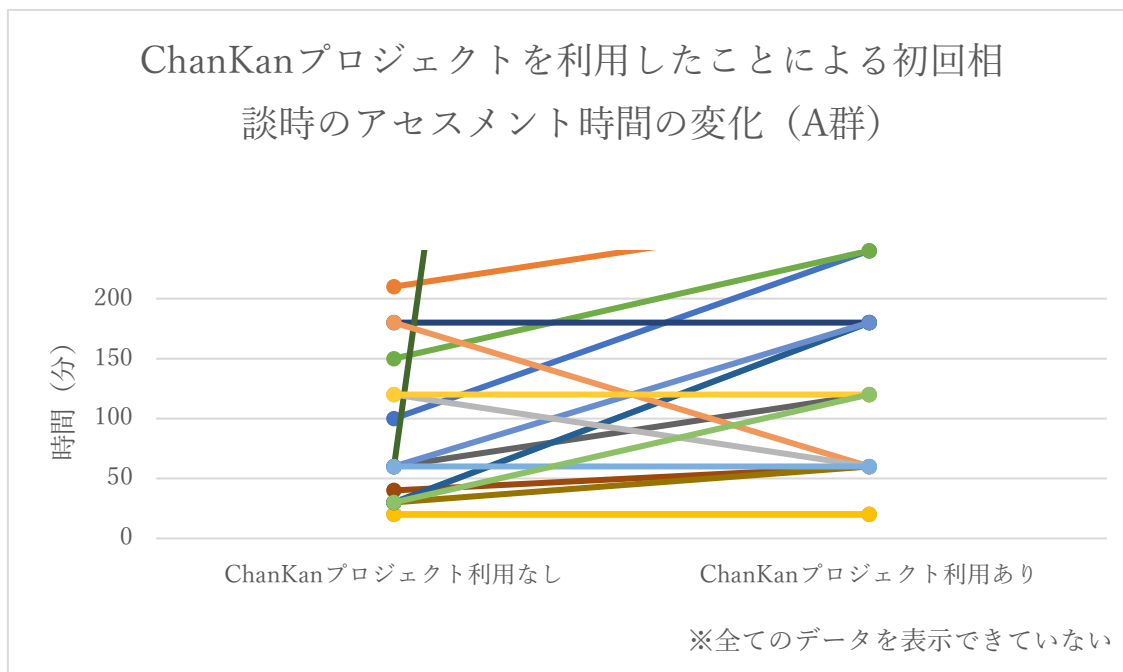


「丁寧にできた」、「容易になった」の回答では、宿泊施設を確保できたことで相談者も精神的に落ち着いて話ができたとことや、宿泊期間中に丁寧なアセスメントができたとの内容が多かった。そのため、アセスメントにかけた時間数も 1 時間以上と丁寧なものであった。また、アセスメントを踏まえ、支援方針の検討に十分に時間を割けたとの回答もあった。



②—3. もし ChanKan プロジェクトを利用していなかったらどれくらいかかっていたと思いますか？

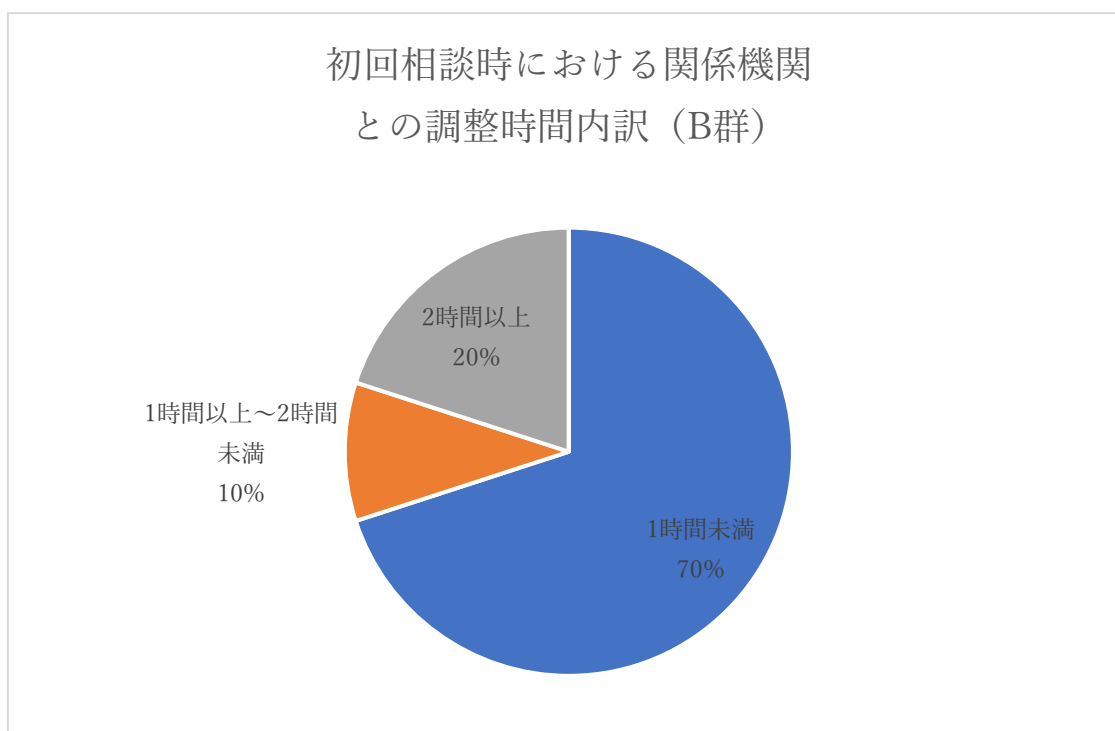
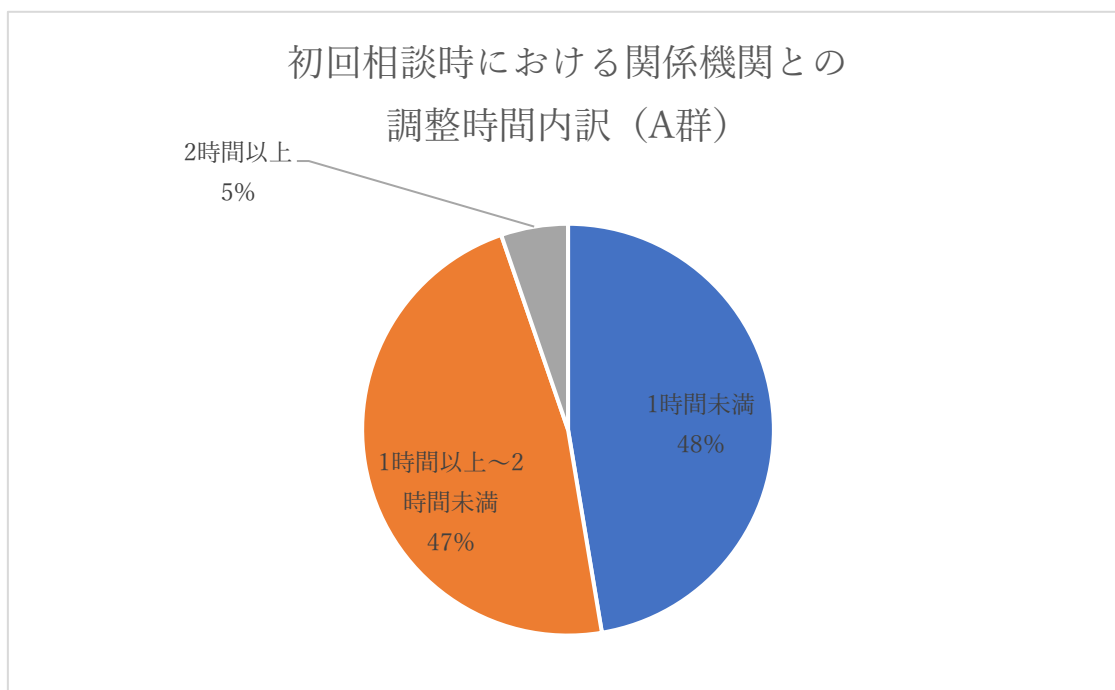
中央値は、A 群が 120(20-2,880)分、B 群が 105(0-1,440)分であった。質問②—1 でたずねた、実際にかかった時間との差の中央値は、A 群が 60(20-2,670)分、B 群が 45(0-1,230)分であった。



時間の比較については、中央値は減少していたが、全体では大きな変化は見られなかった。

③—1. 初回相談時における関係機関との調整時間(分)

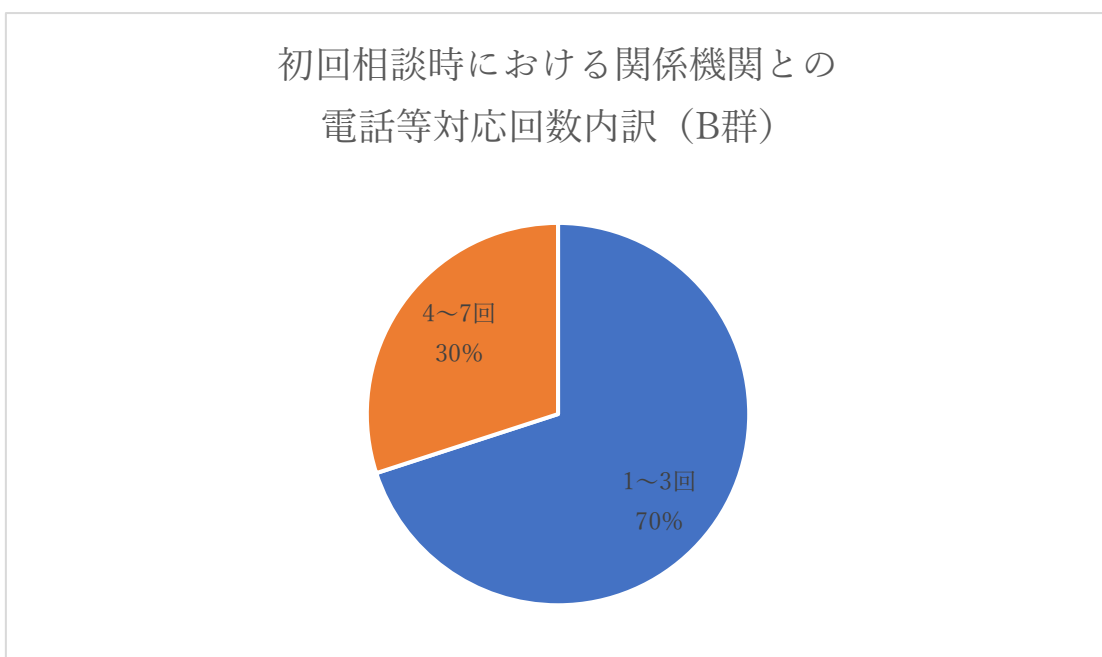
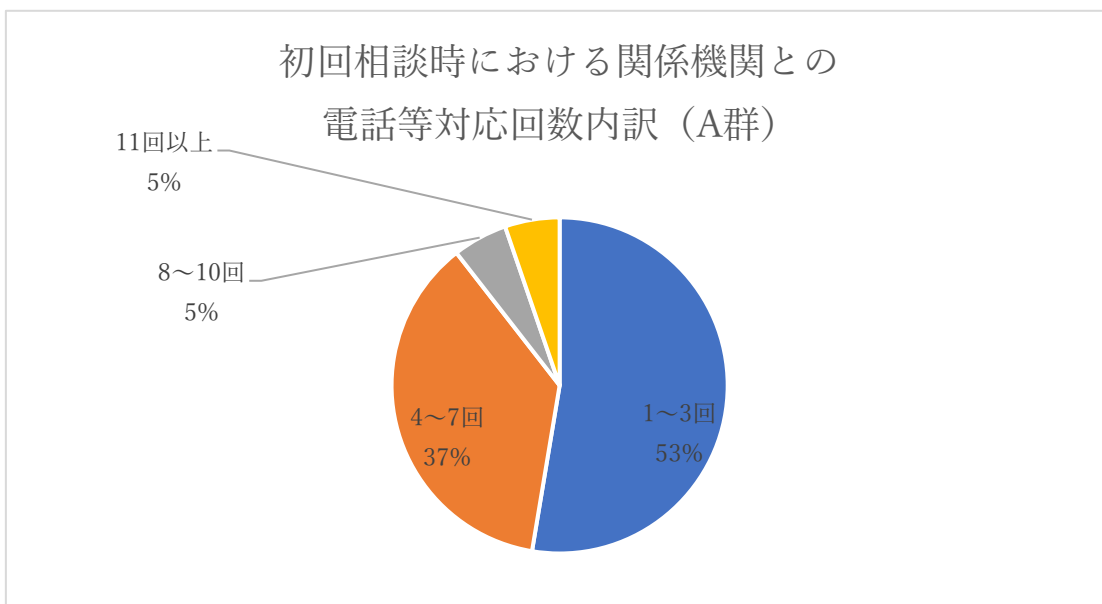
中央値は、A 群が 10(5-120)分、B 群が 25(0-120)分であった。



初回相談時における関係機関との調整時間は、中央値が 30 分未満となっており、多くは 1 時間未満であった。

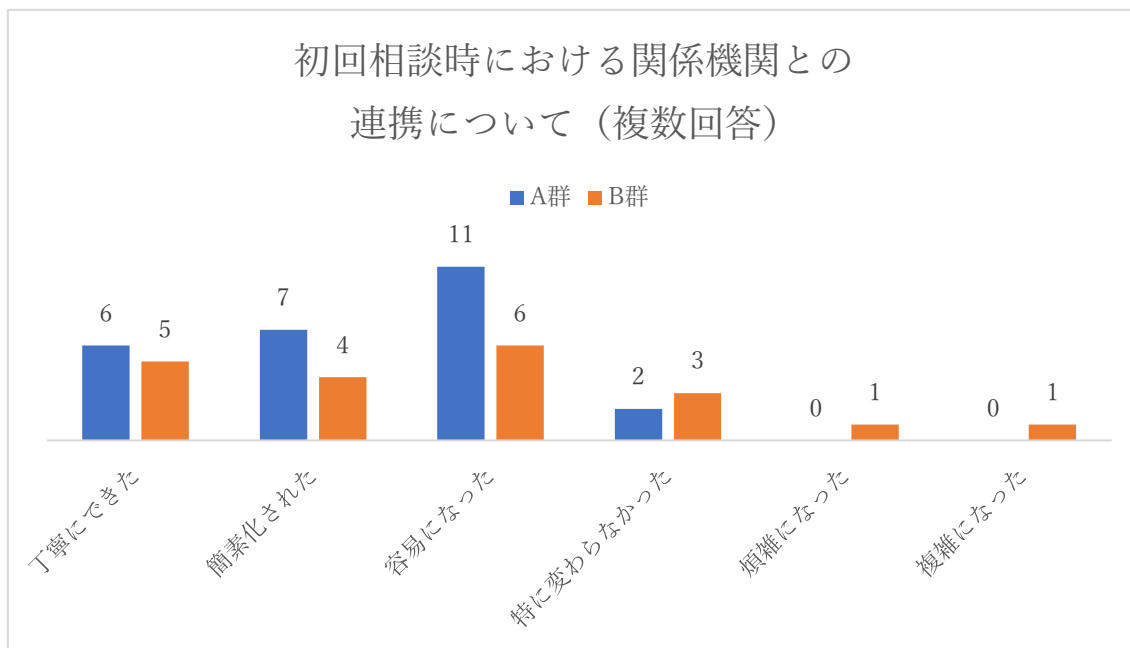
③—2. 初回相談時における関係機関との電話等回数(回)

中央値は、A 群が 3(1-115)回、B 群が 0(2.5-5)回であった。



③—3. 初回相談時における関係機関との連携について(複数回答)

A 群では、「丁寧にできた」6 件、「簡素化された」7 件、「容易になった」11 件、「特に変わらなかった」2 件、「煩雑になった」0 件、「複雑になった」0 件であった。B 群では、「丁寧にできた」5 件、「簡素化された」4 件、「容易になった」6 件、「特に変わらなかった」3 件、「煩雑になった」1 件、「複雑になった」1 件であった。



宿泊支援により、時間に余裕が生まれ、連携する関係機関とのやり取りが容易になったことや、時間によっては受け入れ先が見つからない場合などに利用できたとの回答があった。

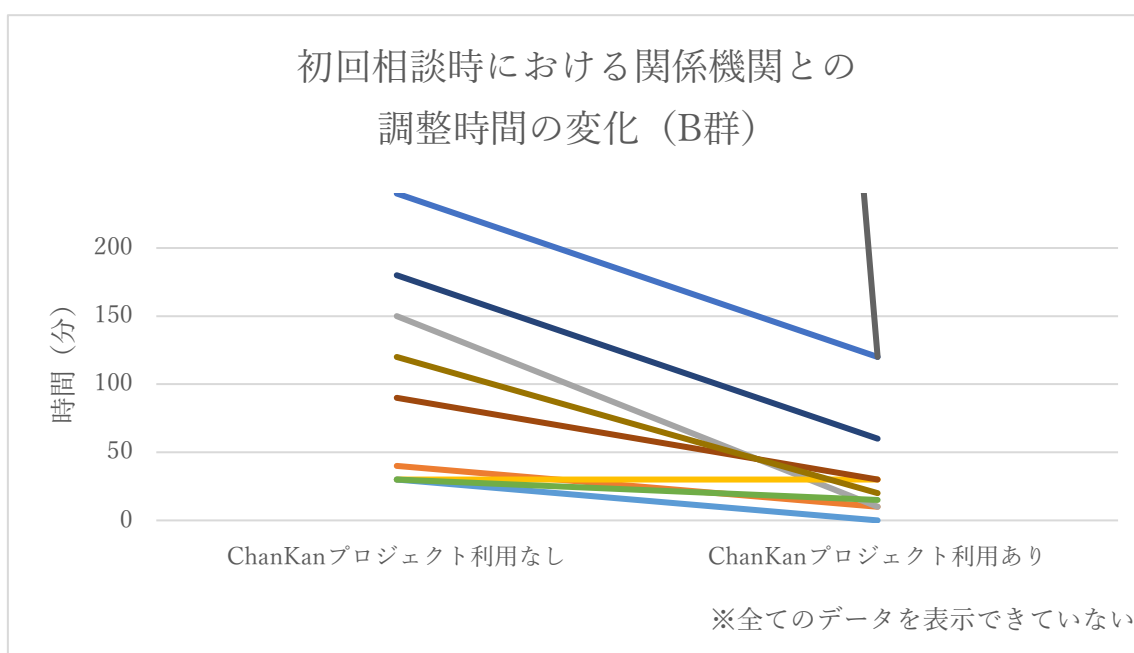
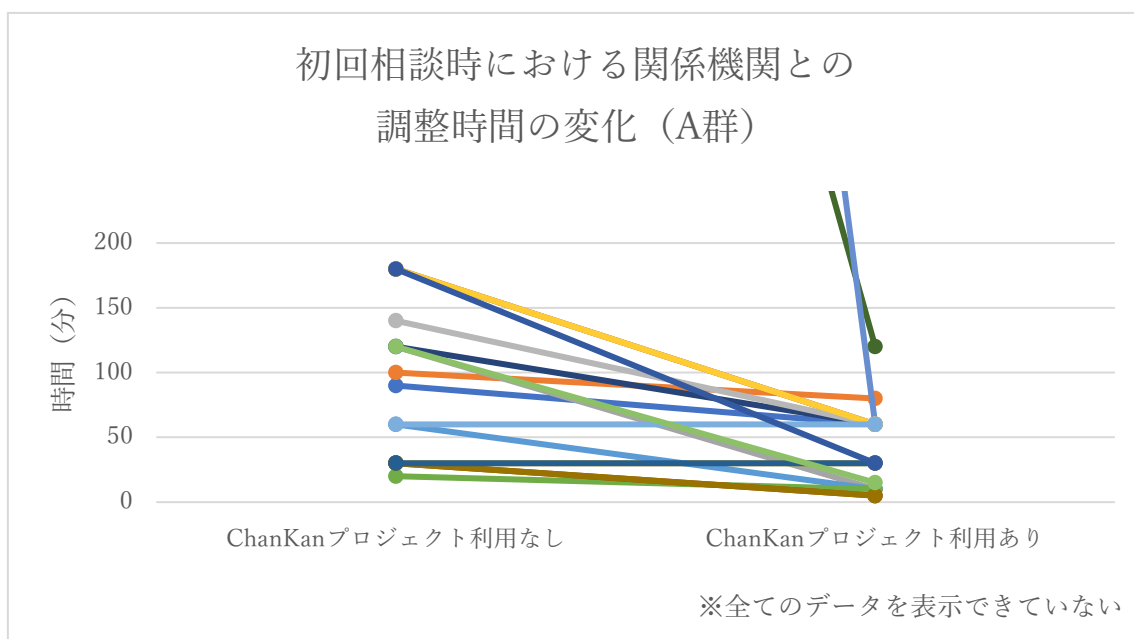
また、従来どおりであれば他の宿泊先を確保しなければならないが、プロジェクトを利用することで、まずは相談を受け入れることができ、次のステップに向けて、他機関とやり取りができたとの回答もあった。

③—4. もし ChanKan プロジェクトを利用していなかったら調整時間はどれくらいかかっていたと思いますか？(分)

中央値は、A 群が 120(20-2,880)分、B 群が 105(30-4,320)分であった。

質問③—1 でたずねた、実際にかかった時間との差の中央値は、A 群が 60(15-2,760)分、B 群が 80(30-4,200)分であった。

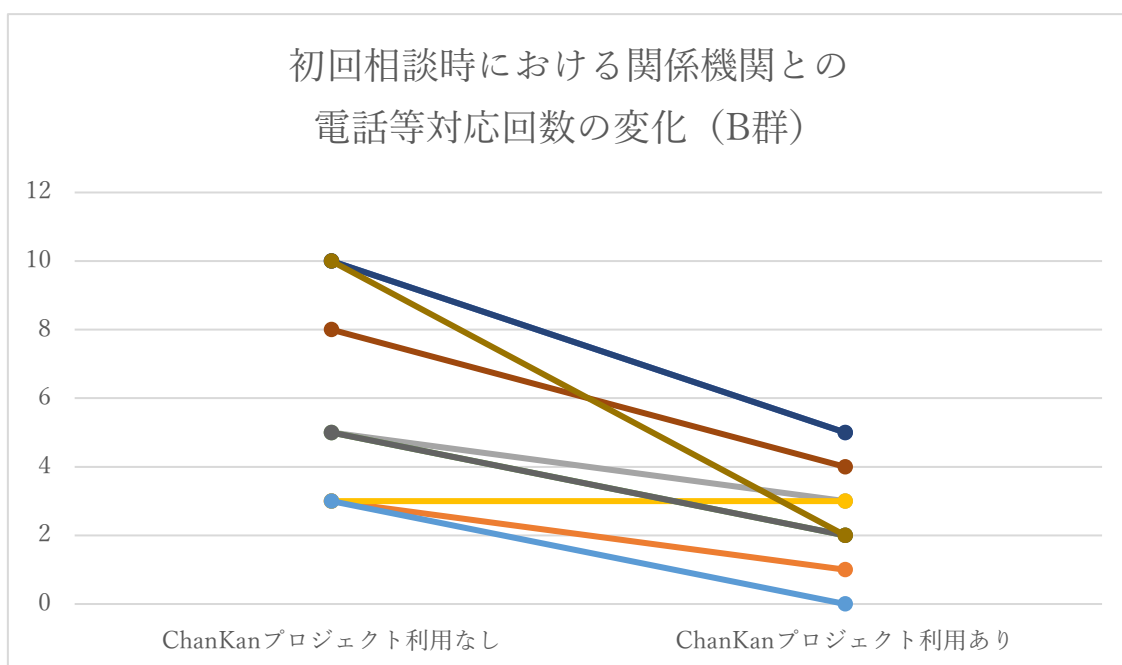
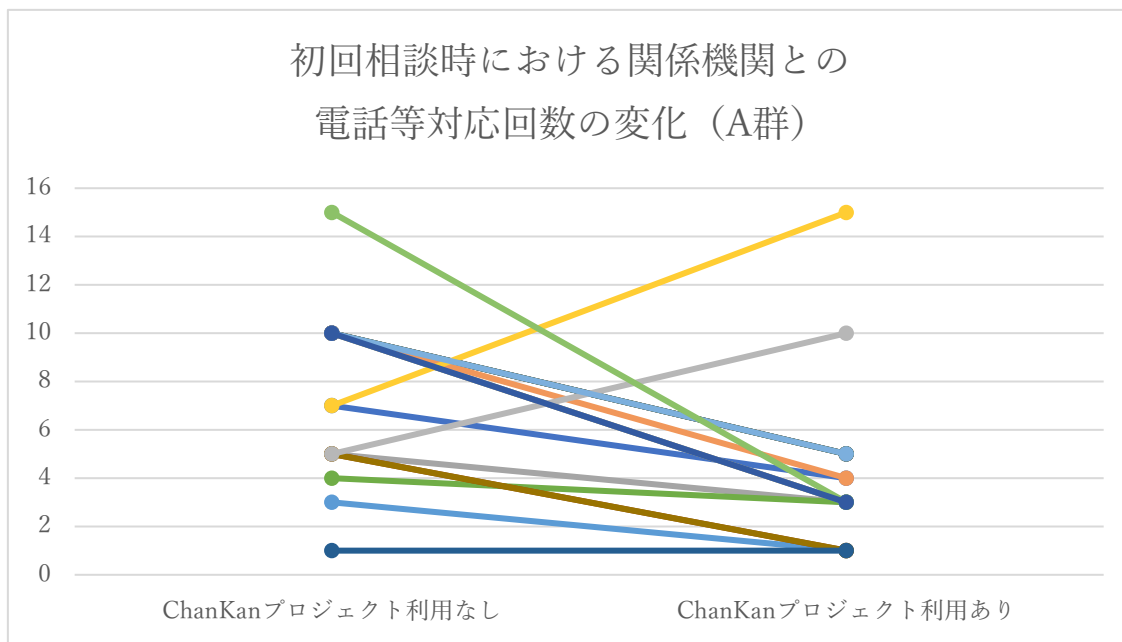
利用による変化として質問③—1 で得た値と質問③—3 で得た値を比較したところ、A 群で利用した場合の方が時間が有意に短かった(Wilcoxon's  $z=-3.52$ ,  $p=0.0004$ )。



③—5. もし ChanKan プロジェクトを利用していなかったら電話等対応回数はどれくらいかかっていたと思いますか？(回)

中央値は、A 群が 10(1-15)回、B 群が 5(3-10)分であった。

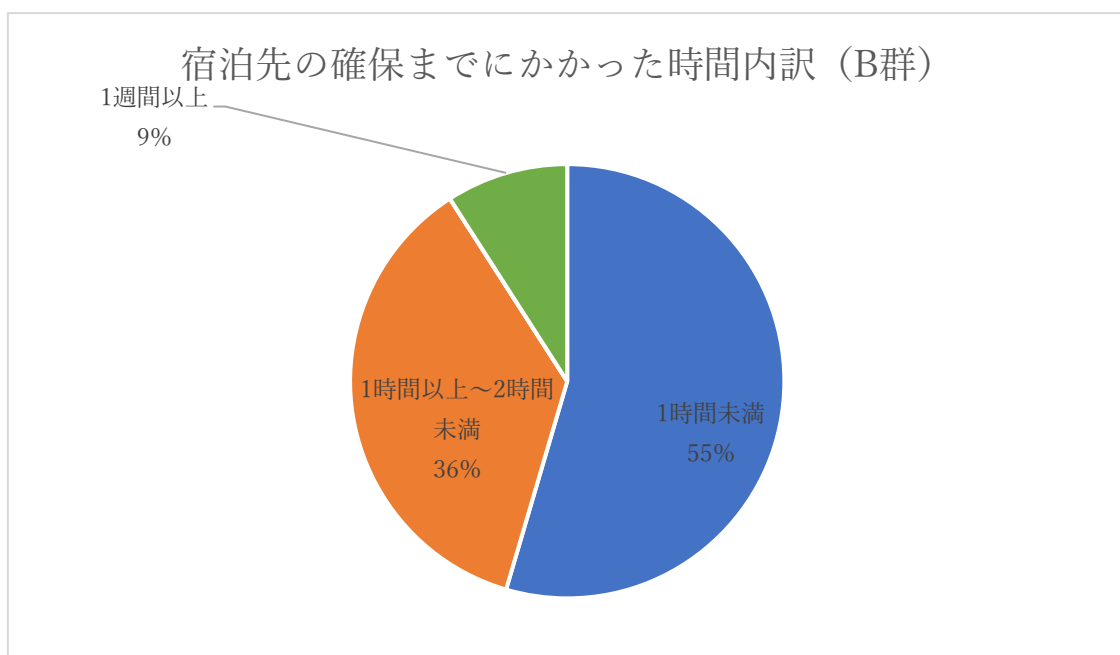
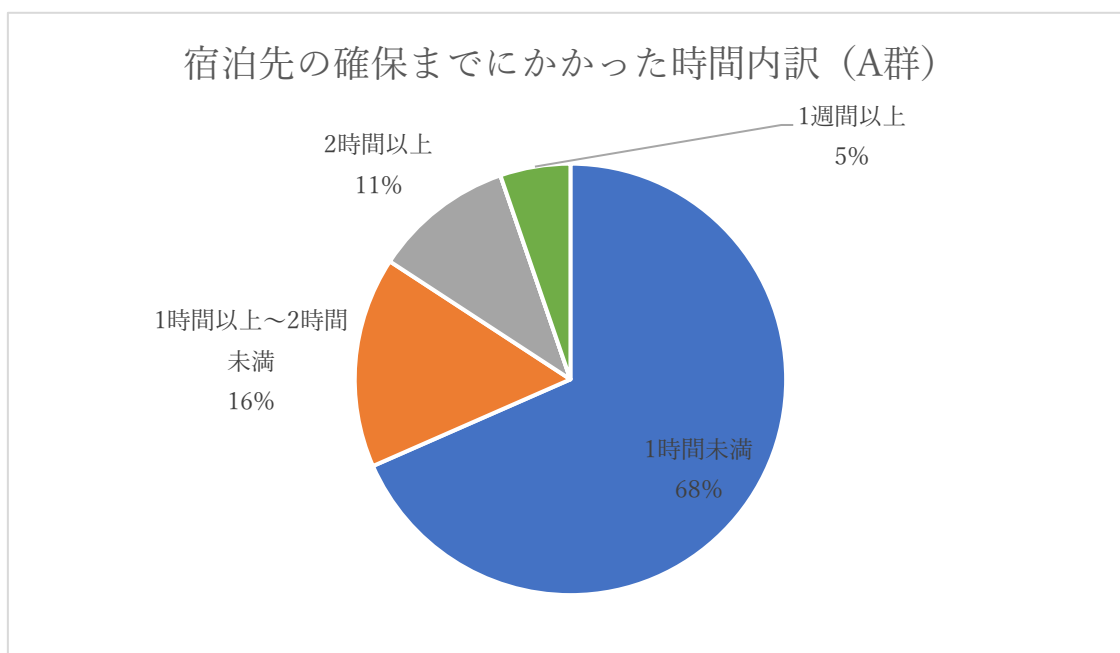
質問③—1 でたずねた、実際にかかった時間との差の中央値は、A 群が 7(1-15)回、B 群が 2.5(3-5)回であった。



電話等対応の回数には減少が見られた。住まいがないなどの緊急性の高い相談の場合には、多くの関係機関と連携していく必要があり、プロジェクトを利用することで、簡素化の効果がみられた。

④—1. 宿泊先の確保までにかかった時間

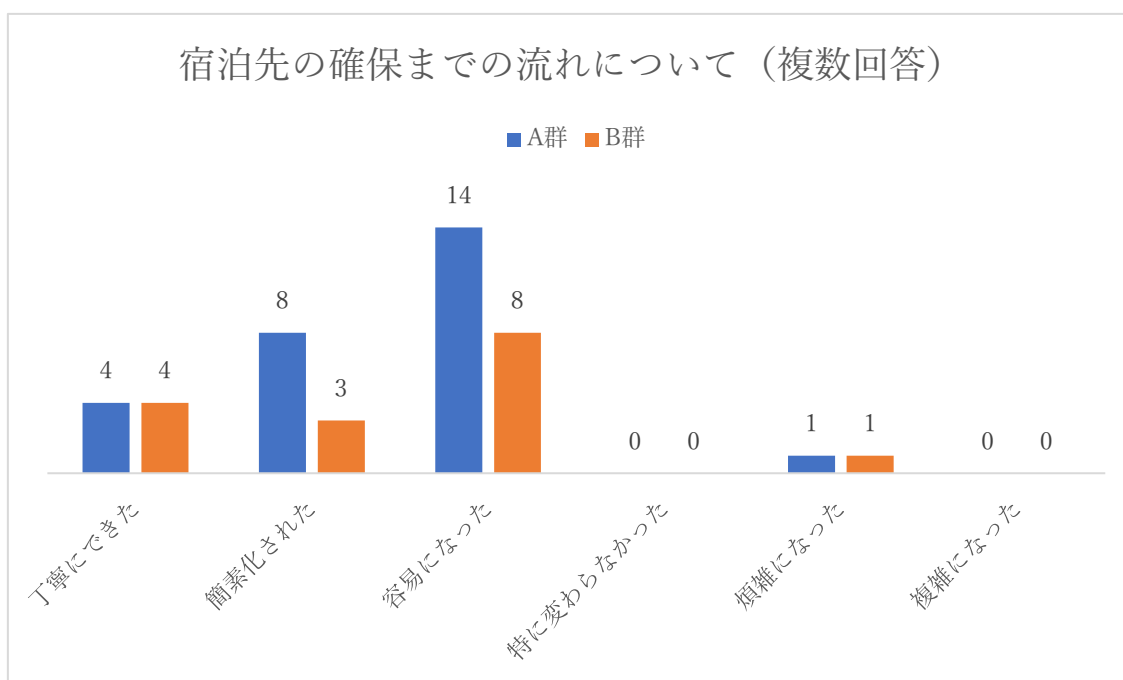
中央値は、A 群が 20(10-12,060)分、B 群が 30(10-12,060)分であった。



プロジェクトへ相談後、半数以上の相談者が1時間未満に宿泊先を確保できていた。

#### ④—2. 宿泊先の確保までの流れについて(複数回答)

A 群では、「丁寧にできた」4 件、「簡素化された」8 件、「容易になった」14 件、「特に変わらなかった」0 件、「煩雑になった」1 件、「複雑になった」0 件であった。B 群では、「丁寧にできた」4 件、「簡素化された」3 件、「容易になった」8 件、「特に変わらなかった」0 件、「煩雑になった」1 件、「複雑になった」0 件であった。



「容易になった」回答が一番多かった。「煩雑になった」回答に関しては、生活困窮者自立相談窓口において、一時生活支援事業との棲み分けにより生じた手続きによるものであった。

相談機関や団体の所在地から近隣の宿泊施設を確保できたことや、宿泊先の確保までの速さに対する良い評価が多かった。なかには公的支援につながる事が難しい在日外国人への支援がスムーズに行えたとの回答もあった。



④—3. もし ChanKan プロジェクトを利用していなかったらどれくらいかかっていたと思いますか？

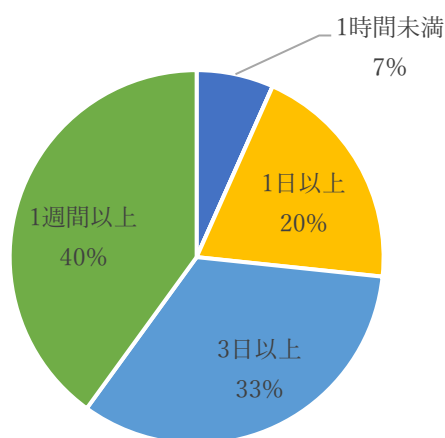
中央値は、A 群が 300(40-14,400)分、B 群が 810(30-14,400)分であった。

質問④—1 でたずねた、実際にかかった時間との差の中央値は、A 群が 270(30-2,340)分、B 群が 780(20-2,340)分であった。

利用による変化として質問④—1 で得た値と質問④—3 で得た値を比較したところ、A 群で利用した場合の方が時間が有意に短かった(Wilcoxon's  $z=-3.62$ ,  $p=0.0003$ )。

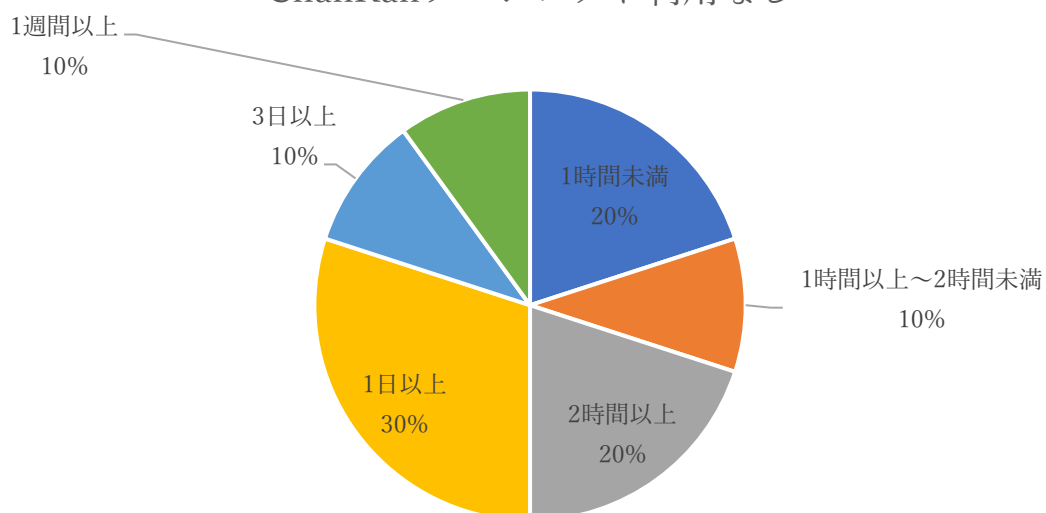
### 宿泊先の確保までにかかった時間内訳 (A群)

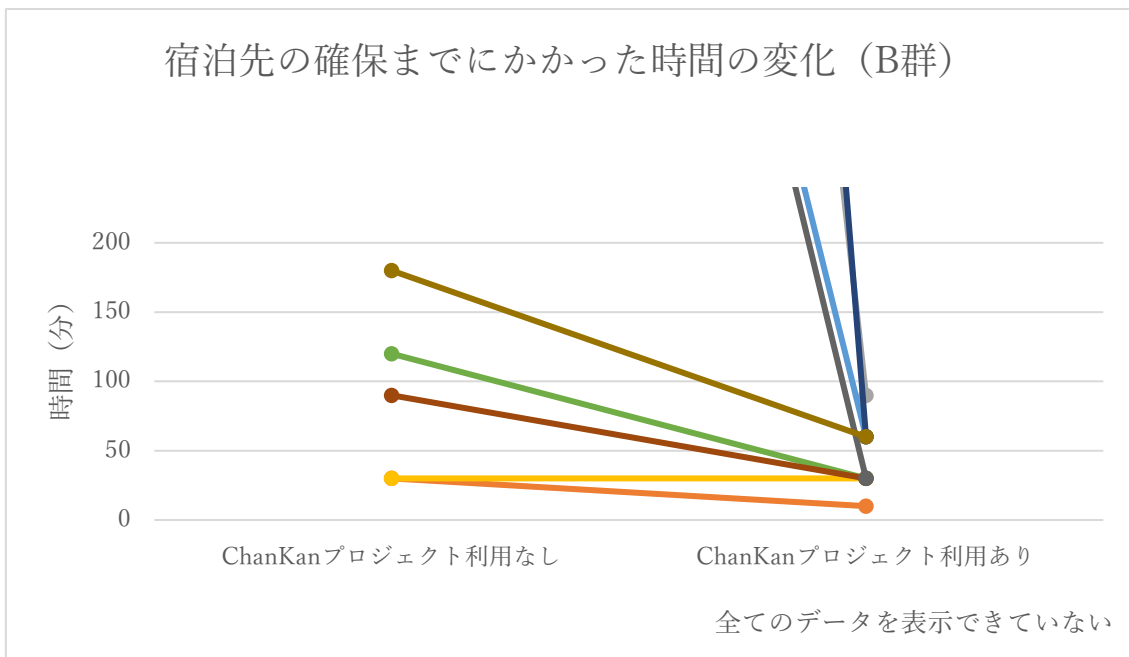
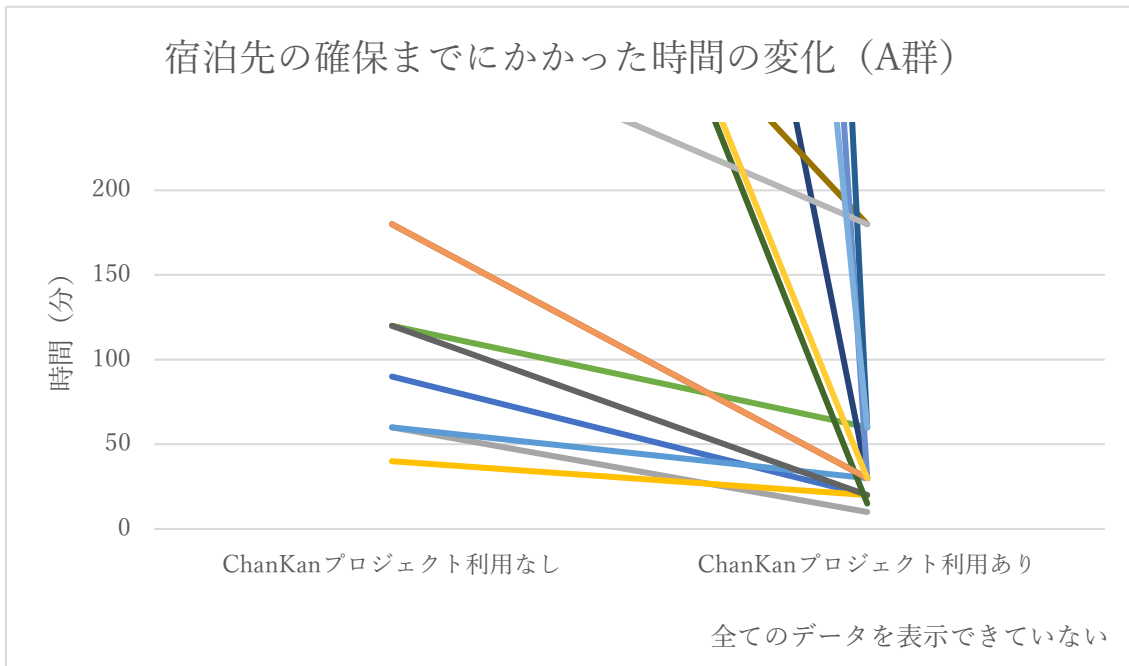
#### ChanKanプロジェクト利用なし



### 宿泊先の確保までにかかった時間内訳 (B群)

#### ChanKanプロジェクト利用なし



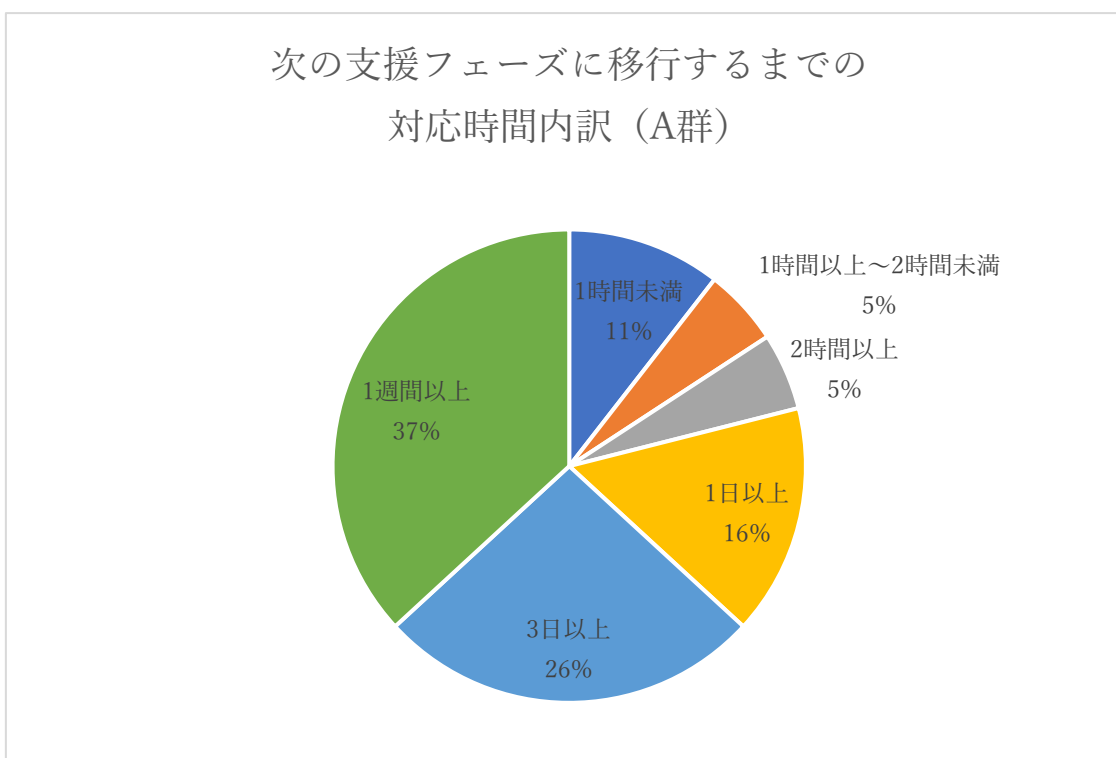
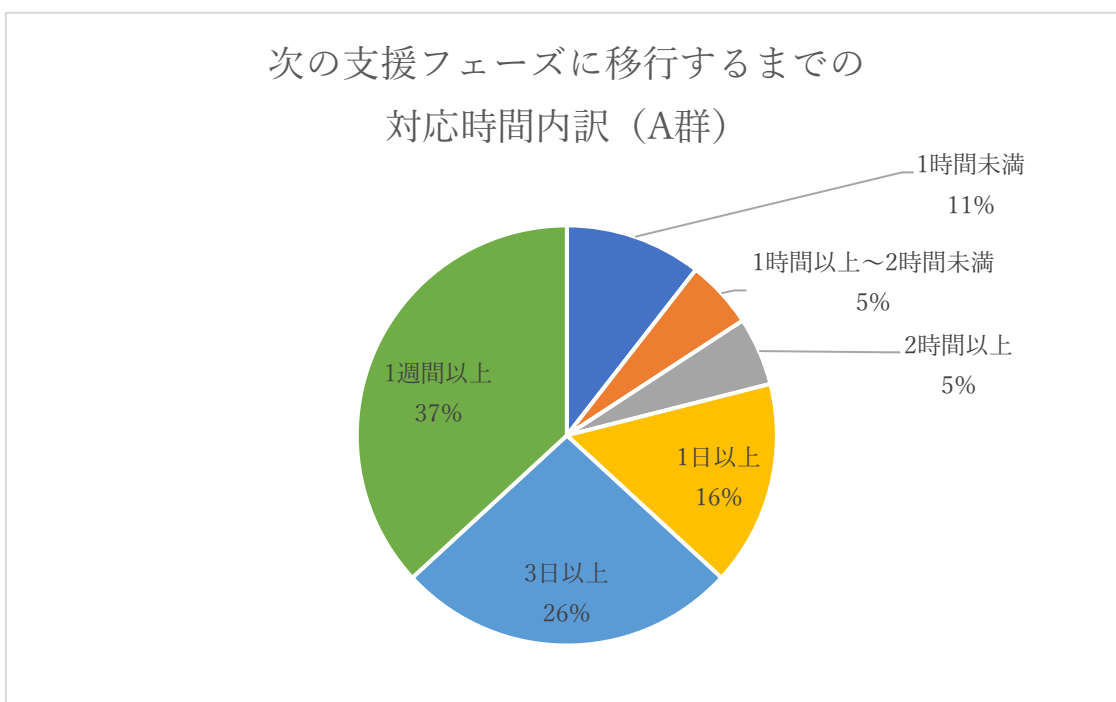


A群、B群ともに宿泊先の確保については、プロジェクトを利用した場合に数時間以内に宿泊先を確保できていた。

一方で、利用していない場合には宿泊先の確保に1日以上かかった例が半数以上を占めており、宿泊先の確保に時間がかかればその間相談者が路上生活など劣悪な環境での生活を強いられた可能性が高いと推測できる。

⑤—1. 次の支援フェーズに移行するまでの対応時間

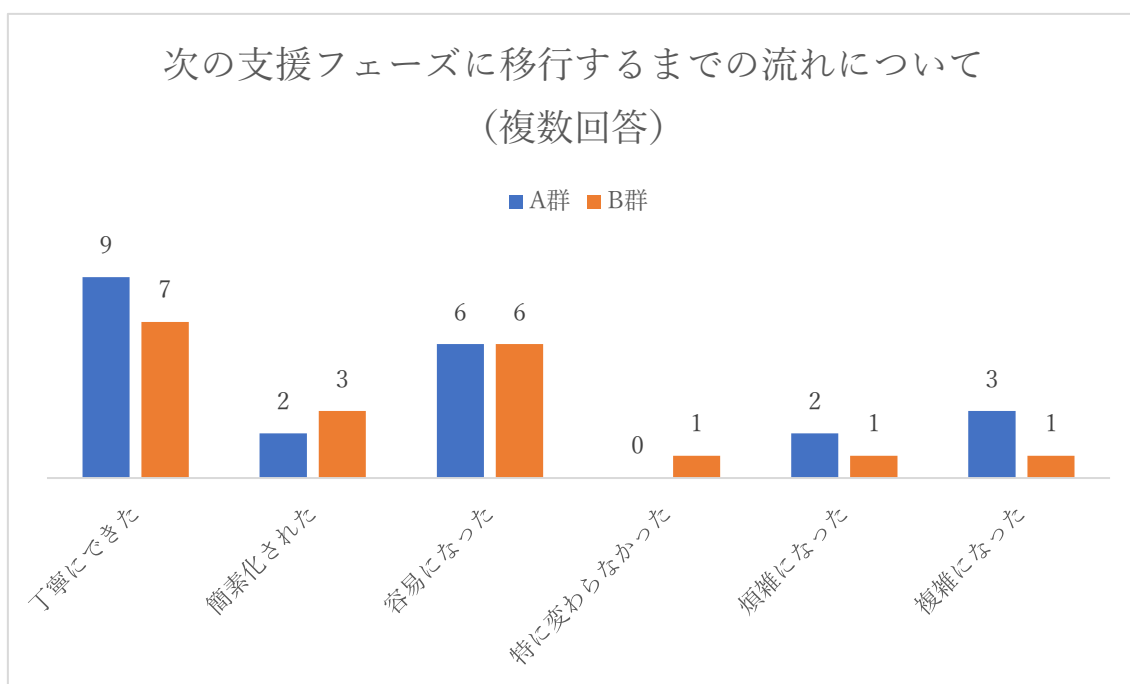
中央値は、A 群が 5,770(0-23,040)分、B 群が 4,320(1,440-21,600)分であった。



プロジェクトを利用した場合においても、次の支援フェーズに移行するまでに 3 日以上かかった例が多かったとわかる。

⑤—2. 次の支援フェーズに移行するまでの流れについて(複数回答)

A 群では、「丁寧になった」9 件、「簡素化された」2 件、「容易になった」6 件、「特に変わらなかった」0 件、「煩雑になった」2 件、「複雑になった」3 件であった。B 群では、「丁寧になった」7 件、「簡素化された」3 件、「容易になった」6 件、「特に変わらなかった」1 件、「煩雑になった」1 件、「複雑になった」1 件であった。



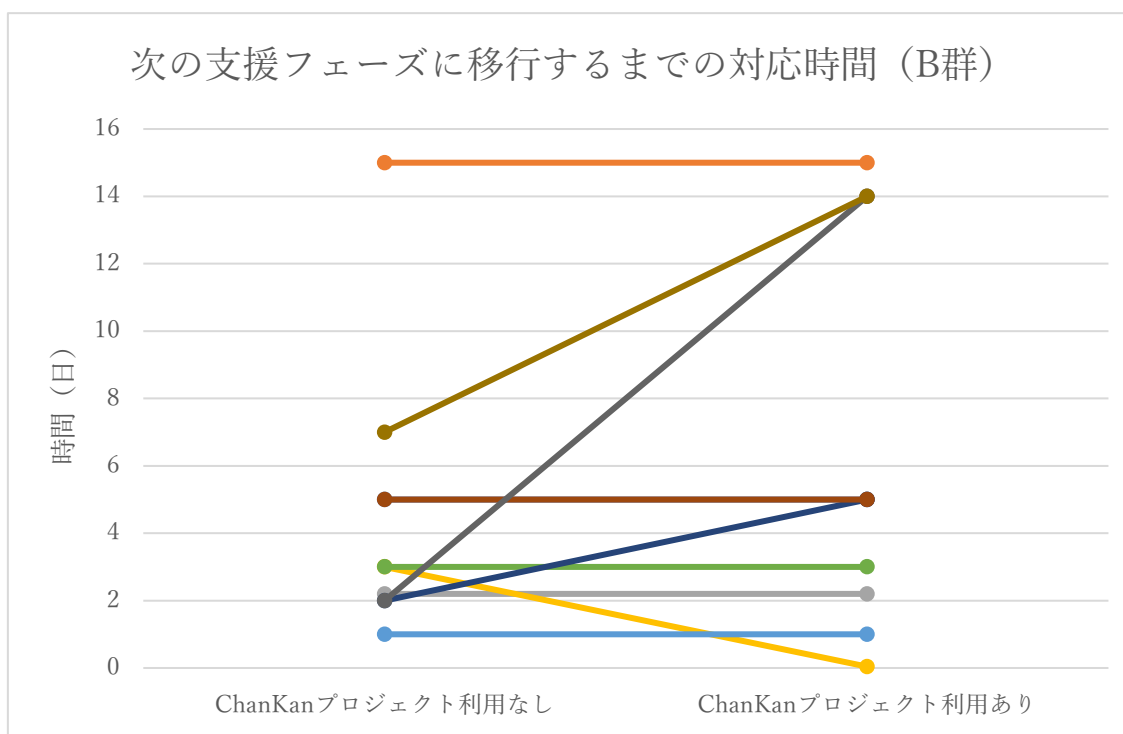
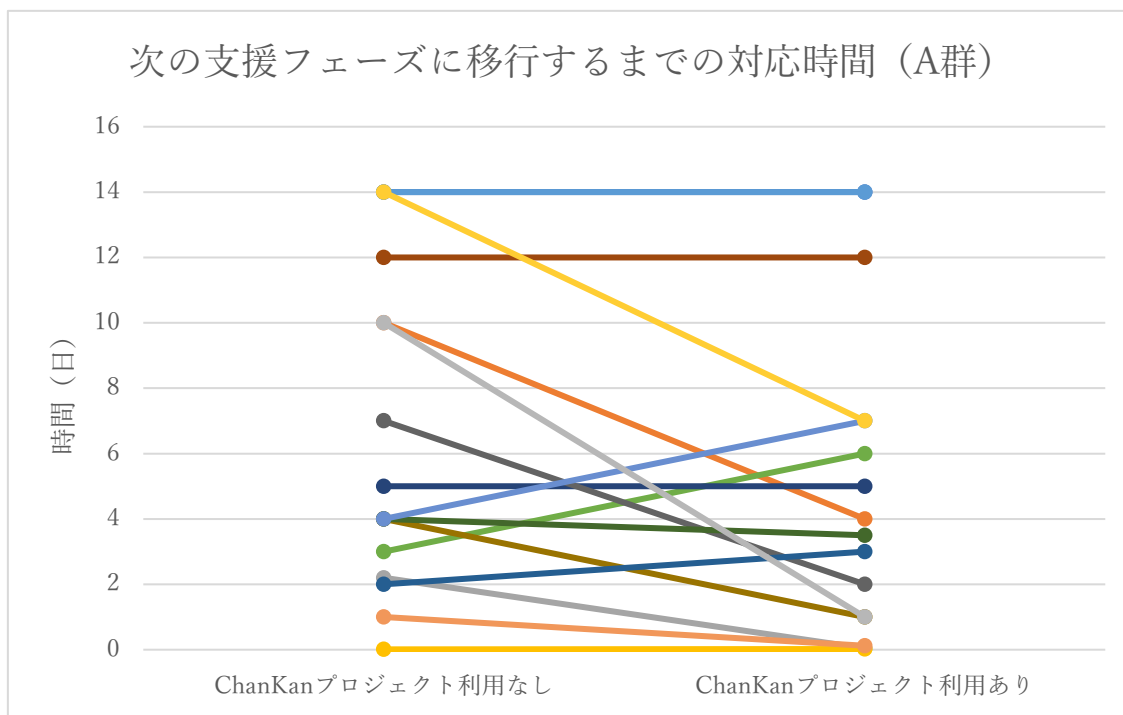
プロジェクトを利用したことで、次の支援フェーズに移行する際に相談者の意向を意識できるようになり、多岐にわたる選択肢を提示できたとの回答が複数あった。

「煩雑になった」、「複雑になった」という回答については、相談者が精神的に安定したこともあり疲れが出てしまった場合や、当面の住まいはプロジェクトの利用で確保できたものの、次の住まいが見つからなかった場合などである。

⑤—3. もし ChanKan プロジェクトを利用していなかったらどれくらいかかっていたと思いますか？  
(分)

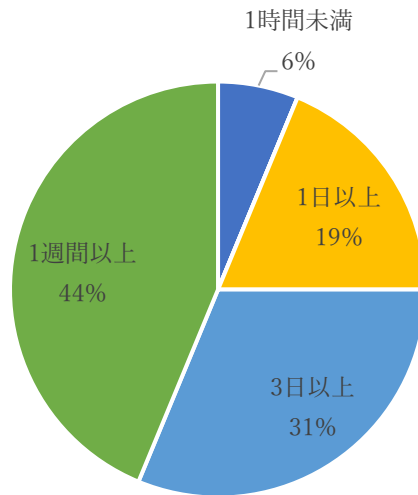
中央値は、A 群が 6,480(20-20,160)分、B 群が 60(7,200-21,600)分であった。

質問⑤—1 でたずねた、実際にかかった時間との差の中央値は、A 群が 710(-2880-20)分、B 群が 2880(-1,380-0)分であった。



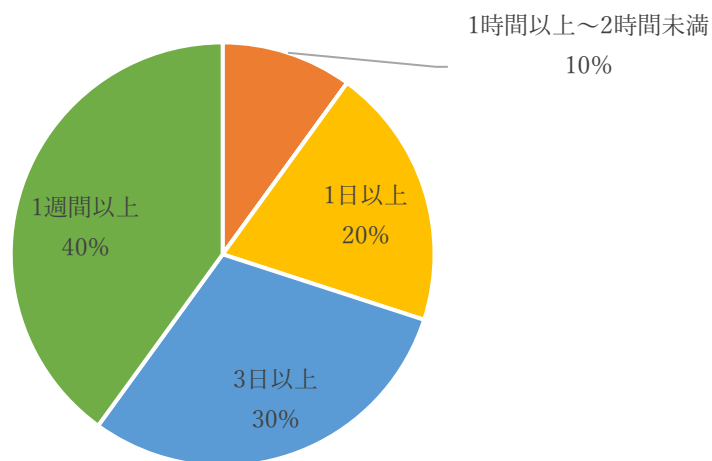
次の支援フェーズに移行するまでの  
対応時間内訳 (A群)

ChanKanプロジェクト利用なし



次の支援フェーズに移行するまでの  
対応時間内訳 (B群)

ChanKanプロジェクト利用なし



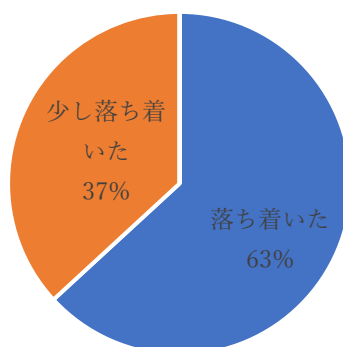
次の支援フェーズに移行するまでの対応時間の比較については、プロジェクトを利用したことによる減少は一部見られたものの、大きくは見られなかった。しかし、住まいに関する相談の場合、次の支援フェーズに移行するまでの時間は1日以上かかることが多かったことがわかる。

Ⅱ. 生活困窮に陥っていて、住まいを失う恐れがある方(経済的に困窮状態である)に対する ChanKan プロジェクトを利用後の状況について

①初回相談と比べ、相談者の様子は変化しましたか？

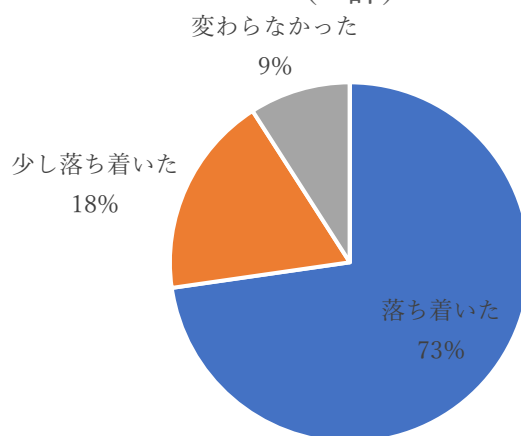
初回相談時と比べ、相談者の様子は変化しましたか？

(A群)



初回相談時と比べ、相談者の様子は変化しましたか？

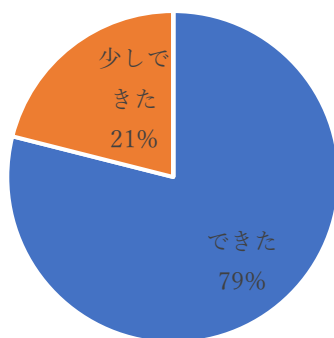
(B群)



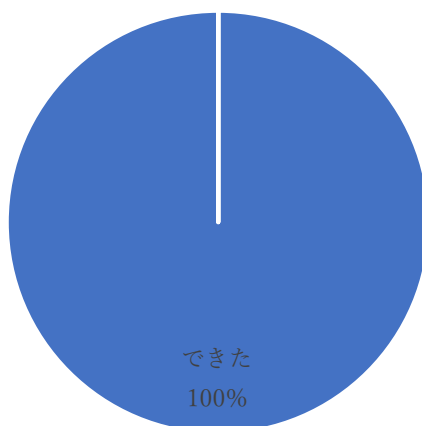
A群、B群ともに落ち着いたとの回答が6割以上を占めた。アセスメントの効果でも明らかになったが、安心して宿泊できる場所を確保することで、相談者も落ち着いて対応できることがわかる。

②ChanKanプロジェクトを利用することで、支援者がより落ち着いて相談支援対応できましたか？

ChanKanプロジェクトを利用することで、支援者がより落ち着いて相談支援対応できましたか？（A群）



ChanKanプロジェクトを利用することで、支援者がより落ち着いて相談支援対応できましたか？（B群）

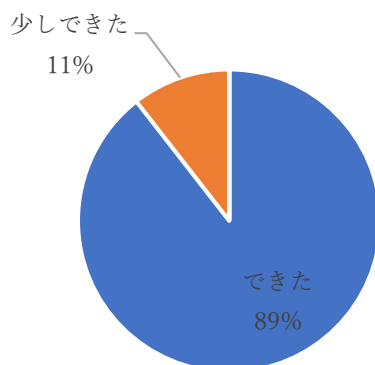


A 群、B 群ともに支援者が落ち着いて対応できたことがわかる。緊急性の高い相談では、支援者が対応に急な判断を迫られることもあり、プロジェクトの利用によって丁寧な支援につながった効果がみられた。

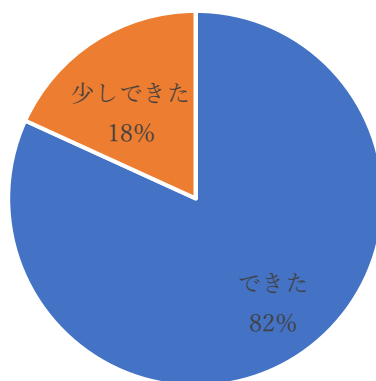


③ChanKan プロジェクトの利用によって、支援者が柔軟な支援策を相談者に提供することができましたか？

ChanKanプロジェクトの利用によって、支援者が  
柔軟な支援策を相談者に提供することが  
できましたか？（A群）



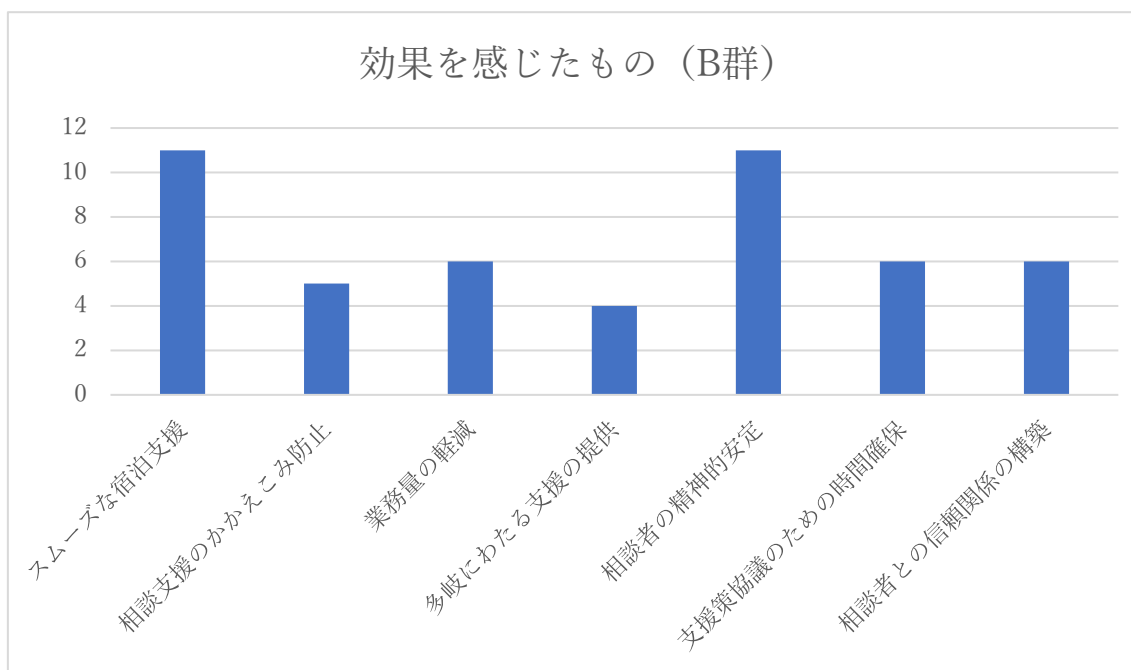
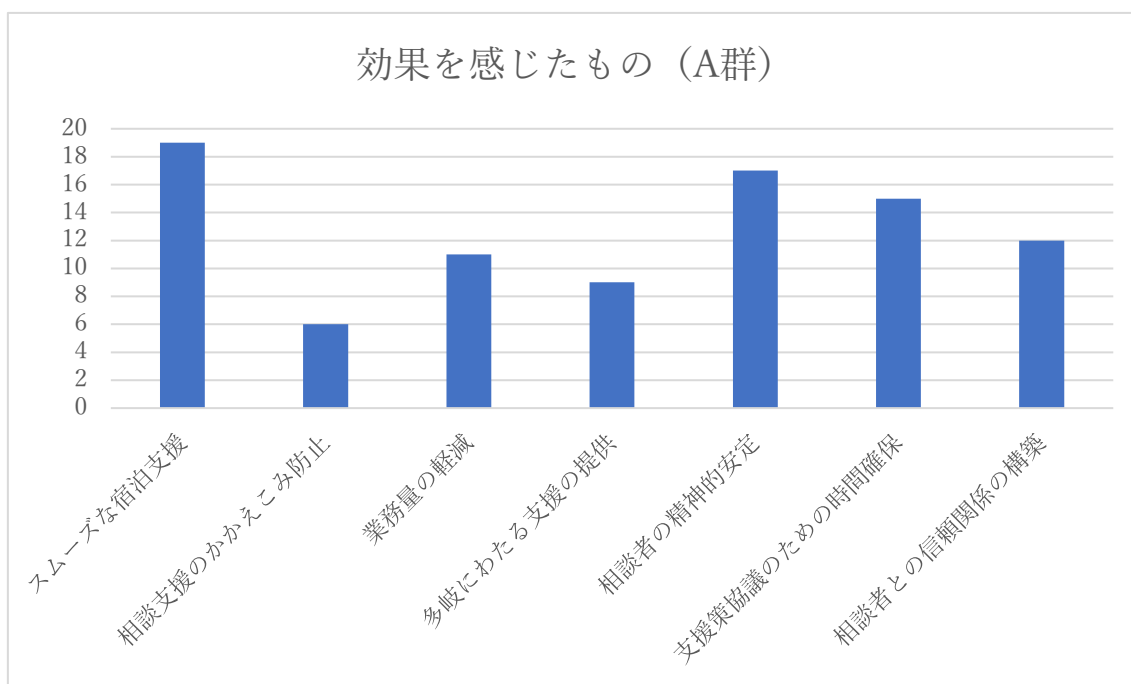
ChanKanプロジェクトの利用によって、支援者が  
柔軟な支援策を相談者に提供することが  
できましたか？（B群）



A 群、B 群ともに「できた」回答が 8 割以上を占めた。

④効果を感じたものにチェックを入れてください(複数回答)

A 群では、「スムーズな宿泊支援」19 件、「相談支援のかかえこみ防止」6 件、「業務量の軽減」11 件、「多岐にわたる支援の提供」9 件、「相談者の精神的安定」17 件、「支援策協議のための時間確保」15 件、「相談者との信頼関係の構築」12 件であった。B 群では、「スムーズな宿泊支援」11 件、「相談支援のかかえこみ防止」5 件、「業務量の軽減」6 件、「多岐にわたる支援の提供」4 件、「相談者の精神的安定」11 件、「支援策協議のための時間確保」6 件、「相談者との信頼関係の構築」6 件であった。



A 群、B 群ともに「スムーズな宿泊支援」回答が一番多く、「相談者の精神的安定」が次に多かった。同時に「相談者との信頼関係の構築」も効果としてみられ、宿泊支援のみではなく、継続支援につながるための支援ツールとしても効果が見られた。

また、緊急性の高い住まいの相談にあたって、「支援策協議のための時間確保」も効果として見られ、次の支援フェーズに移行するまでの支援を提供することができた。

#### IV. 結論

今回の調査により、プロジェクトが特に緊急性の高いケースへの対応に当たり、インテーク面接、調整、宿泊先確保のプロセスに要する時間を大きく短縮していたことを確認した。

インテーク面接や関係機関との調整を効率的に実施することにより支援者は相談者にかかる他のプロセスに時間を向けることができるようになり、関わり全体の時間を長時間化させることなくプロジェクトとしての支援を完了し次の支援につなぐことができていた。緊急性の高いケースであってもプロジェクトの利用により一定の支援を確保することができ、プロジェクトの利用により支援が長期化したり煩雑化することはなく、さらに支援者の負担感を増大させることはなかったことから、同プロジェクトは有効であると考えられる。

一方で、プロジェクトを利用することで時間を要したケースもあった。従来の居住支援だけではなく、新たな支援策を模索するためのプロジェクトであったため、支援機関・団体の相談支援スキルが高く求められたと考えられ、今後の課題としたい。

支援の質を評価する試みとして今回は支援者の実施した行為に着目したが、プロジェクト利用者を対象として支援がニーズに合うものであったかなど聞き取りを行い引き続き評価を行いたい。